

2024 年度大会アンケート報告

会員各位：

2024 年 10 月 12 日・13 日に開催された日本中国学会第 76 回大会（於二松学舎大学）について、11 月 10 日を期限として Microsoft Forms にて大会アンケートを実施しましたところ、220 名の会員から回答をいただきました。ご協力ありがとうございました。アンケート結果は、次回以降の大会開催の参考とさせていただきます。

以下、自由記述欄などで、複数のご意見があった問題、たとえば「大会のハイブリット開催への要望」、「参加申し込みと参加費徴収の方式」、「大会での発表レジュメ問題」、「大会の託児サービス」、「大会発表の若手会員の大会参加宿泊費補助制度」等については、関連する項目で、【大会委員会からの補足説明】を附しています。

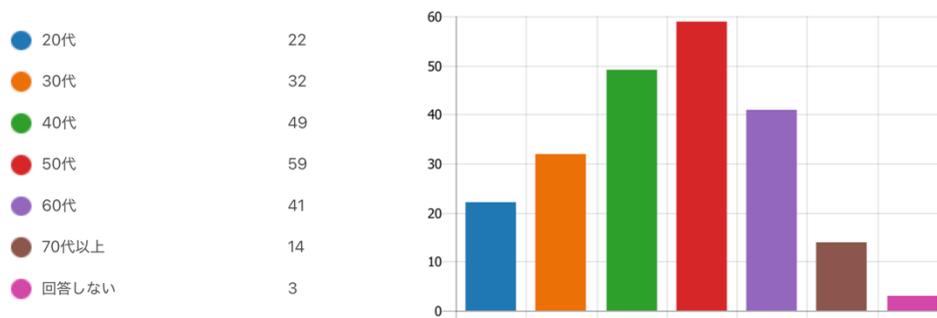
なお、今年度から大会アンケートは、大会委員会の所管となっています。この報告では、大会に関することに限定しましたので、あらかじめご承知おきください。

大会委員会
2025 年 3 月 31 日

I. 回答者について

■回答者の年齢

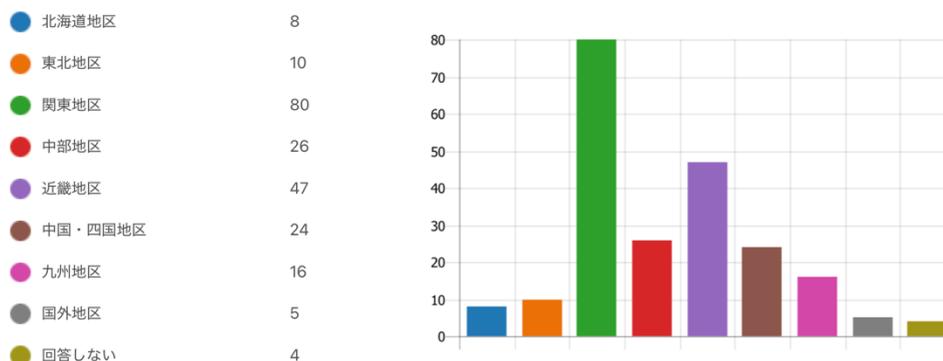
1. あなたの年齢をお選びください。



220 件の回答のうち、「20 代」22 名（10%）、「30 代」32 名（14.5%）、「40 代」49 名（22.2%）、「50 代」59 名（26.8%）、「60 代」41 名（18.6%）、「70 代以上」14 名（6.3%）、「回答しない」3 名（1.3%）であった。

■回答者の所属地区

2. あなたの所属地区をお選びください。

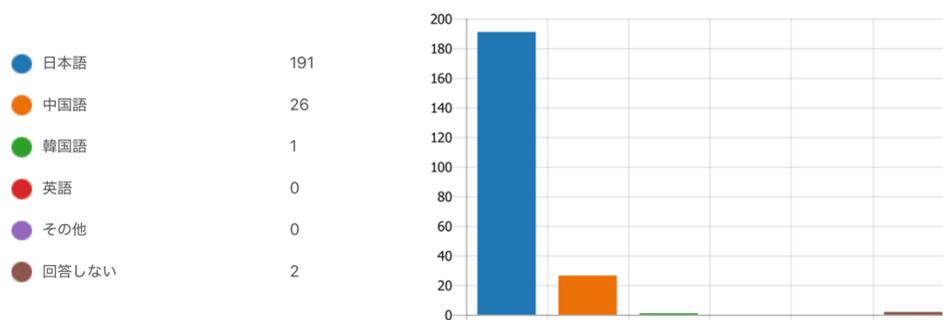


220 件の回答のうち、「北海道地区」8 名 (3.6%)、「東北地区」10 名 (4.5%)、「関東地区」80 名 (36.3%)、「中部地区」26 名 (11.8%)、「近畿地区」47 名 (21.3%)、「中国・四国地区」24 名 (10.9%)、「九州地区」16 名 (7.2%)、「国外地区」5 名 (2.2%)、「回答しない」4 名 (1.8%) であった。

なお、対面の参加者 (114 名) に限ってみれば、「北海道地区」5 名 (4.3%)、「東北地区」7 名 (6.1%)、「関東地区」46 名 (40.3%)、「中部地区」13 名 (11.4%)、「近畿地区」19 名 (16.6%)、「中国・四国地区」13 名 (11.4%)、「九州地区」7 名 (6.1%)、「国外地区」1 名 (0.8%)、「回答しない」3 名 (2.6%) であった。

■回答者の主たる使用言語

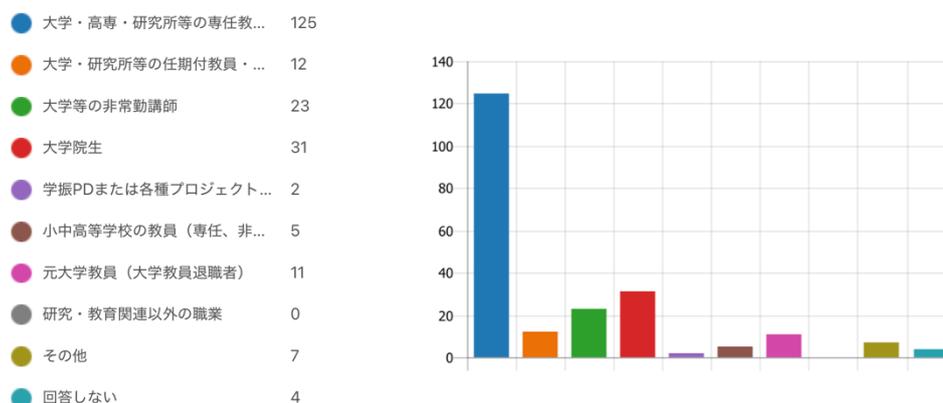
3. あなたの主たる使用言語をお選びください。



220 件の回答のうち、「日本語」191 名 (86.8%)、「中国語」26 名 (11.8%)、「韓国語」1 名 (0.4%)、「回答しない」2 名 (0.9%) であった。

■回答者の職業、身分

4. あなたのご職業、身分をお選びください。



220 件の回答のうち、多い順に「大学・高専・研究所等の専任教員」125 名（56.8%）、「大学院生」31 名（14.0%）、「大学等の非常勤講師」23 名（10.4%）、「大学・研究所等の任期付教員・特任教員」12 名（5.4%）、「元大学教員（大学教員退職者）」11 名（5.0%）、「その他」7 名（2.2%）、「小中高等学校の教員（専任、非常勤）」5 名（3.1%）、「回答しない」4 名（1.8%）、「学振 PD または各種プロジェクト等の研究院」2 名（0.9%）であった。

なお、対面の参加者（114 名）に限ってみれば、「大学・高専・研究所等の専任教員」71 名（62.2%）、「大学院生」21 名（18.4%）、「大学等の非常勤講師」8 名（7.0%）、「大学・研究所等の任期付教員・特任教員」6 名（5.2%）、「その他」3 名（2.6%）、「回答しない」2 名（1.7%）、「学振 PD または各種プロジェクト等の研究院」1 名（0.8%）「小中高等学校の教員（専任、非常勤）」1 名（0.8%）、「元大学教員（大学教員退職者）」1 名（0.8%）であった。

II. 大会参加状況について

■大会への参加不参加

5. 10月12日、13日の大会に参加されましたか。

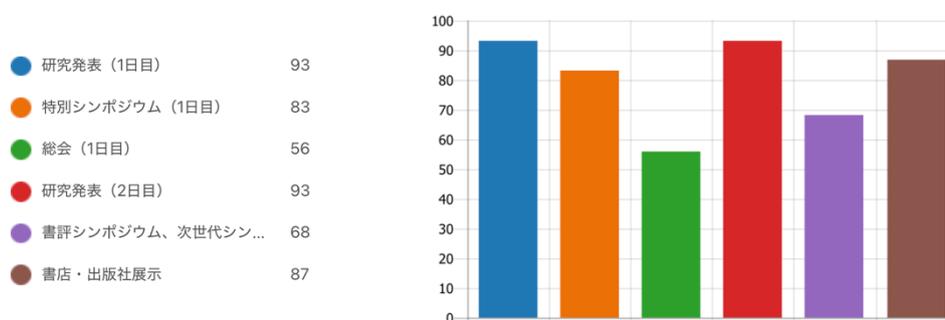


220 件の回答のうち、「参加した（対面）」114 名（51.8%）、「参加しなかった」101 名

(45.9%)、「特別シンポジウムのみオンラインで参加した」5名(2.2%)であった。

■大会参加者が参加したプログラム

6. 参加された方(対面)について、そのプログラムを全てお選びください。



114件の回答のうち(複数回答可)、「研究発表(1日目)」93名(81.5%)、「特別シンポジウム(1日目)」83名(72.8%)、「総会(1日目)」56名(49.1%)、「研究発表(2日目)」93名(81.5%)、「書評シンポジウム・次世代シンポジウム(2日目)」68名(59.6%)、「書店・出版社展示」87名(76.3%)であった。

■不参加の理由

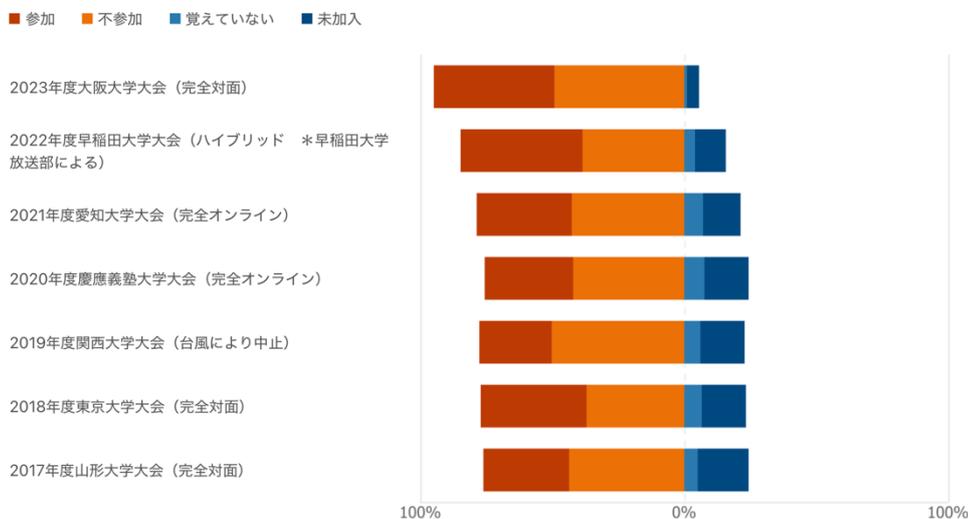
7. 参加しなかった方について、その理由をお選びください。複数回答可。



101件の回答のうち(複数回答可)、多い順に「仕事の都合」60名(59.4%)、「個人的な事情」54名(53.4%)、「経済的な理由」16名(15.8%)、「その他」16名(15.8%)、「回答しない」3名(2.9%)であった。

■過去7年間（コロナ前、中、後）の参加状況

8. 過去7年間（コロナ前、中、後）の参加状況について、お選びください。*2019年度関西大学大会については、「予定」（参加申し込みをしたか否か）でお答えください。

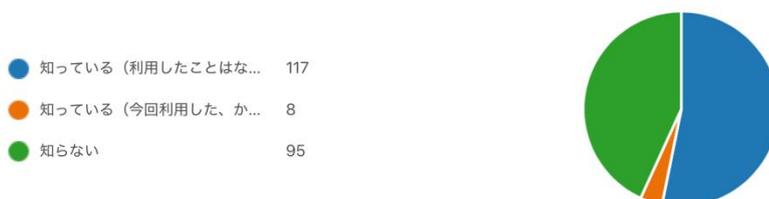


220 件の回答のうち、各大会における参加者の割合のみを示せば、「2023 年度大阪大学大会（完全対面）」は 45.5%、「2022 年度早稲田大学大会（ハイブリッド）」は 45.9%、「2021 年度愛知大学大会（完全オンライン）」は 35.9%、「2020 年度慶應義塾大学大会（完全オンライン）」は 33.2%、「2019 年開催大学大会（台風により中止）」は 27.3%（参加申し込み者）、「2018 年度東京大会（完全対面）」は 40%、「2017 年度山形大会（完全対面）」は 32.3% であった。

Ⅲ. 大会の支援について

■若手研究者への学会参加支援について

9. 若手研究者への学会参加支援があることをご存知ですか。



220 件の回答のうち、「知っている（利用したことはない）」117 名（53.1%）、「知っている（今回利用した、かつて利用したことがある）」8 名（3.6%）、「知らない」95 名（43.1%）

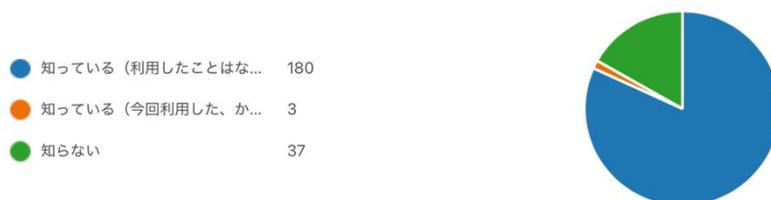
であった。自由記述欄でも「若手の発表者向けの金銭補助（宿泊費）は、宿泊費高騰化の昨今、たいへん素晴らしい制度」と評価する声が寄せられている。また一層の拡大を望む声もあった。具体的には、「次世代研究者の報告者に対する助成金の増額」や「懇親会会費のさらなる割引」などである。

【大会委員会からの補足説明】

2022年度より若手会員の支援を主たる目的とする「特別寄付金会計」が設けられ、大会で発表（次世代シンポジウム・書評シンポジウム等のシンポジウム企画での登壇を含む）する若手会員のうち、遠方に在住し、宿泊を必要とする方が、宿泊費を私費により支出する場合に、「特別寄付金会計」より一律1万円の補助金を支給する制度がスタートしています。アンケートによると、この制度を知らないという方がまだまだたくさんおられるようです。ぜひ、周りの若手会員に制度利用についてお声がけをお願いします。

■託児サービスについて

10. 託児サービスがあることをご存知ですか。



220件の回答のうち、「知っている（利用したことはない）」180名（81.8%）、「知っている（今回利用した、かつて利用したことがある）」3名（1.3%）、「知らない」37名（16.8%）であった。託児サービスについては、自由記述欄でもぜひ継続してほしいという意見が寄せられている。

【大会委員会からの補足説明】

本学会では第67回大会（2015）國學院大學の時に、はじめて外部委託の形で託児室を設置し、爾来、対面方式の大会では安価な託児サービスを提供してきました。託児サービスには臨時託児室の開設のほか、託児費用の援助などがあり、2024年度は開催校の設備上の事情により、託児費用を援助する方式になりました。なお、2024年6月2日の理事会において、本学会では開催校の事情を鑑みながら大会の託児サービスを継続する方針であることが確認されています。子育て中の会員は大会参加の際、ぜひご利用ください。

■本大会において特に印象に残ったプログラムについて

39名の方からご意見が寄せられた。以下、主な意見を示す。

○特別シンポジウム

- ・大変刺激的で勉強になった。面白かった。
- ・西洋古典学という、東洋学との鏡映しのように、大変興味を持ってはいたものの言語の壁のために原テキストには触れ難い分野の碩学のお話しをうかがえた。
- ・他分野の先生の話の拝聴することができ、とくに印象的だった。
- ・非常に興味深い内容で素晴らしかった。他分野の研究について聞くことの出来る機会は貴重であり、大変勉強になった。
- ・異分野の方法論に関して貴重かつ参考になる講演を聴けたのが良かった。
- ・中国学以外の知見を踏まえた議論を進めていくことは、今後重要になってくると思うが、その質の高いモデルを見せていただいたように感じている。
- ・特別シンポジウムのみだったが、オンラインで参加できたのはよかった。
- ・他分野の知見が聴かれたことがいい刺激になった。できれば、もう少しフロアや司会の先生方とのやり取りがあればと思った。
- ・発表時間がはっきりせず、後ろ倒しになって後半の発表者のプレゼンが駆け足になったり、討論が盛り上がらなかつたりして残念だった。
- ・特別シンポジウムとしての効果をあげていないように感じた。特別講演と称するので十分ではないか。実りあるシンポジウムであるには倍の時間や報告者、報告者と噛み合うコメンテーターが必要ではないか？

○部会発表

- ・若い方々の発表に充実したものが多かった。質疑応答にも啓発される場所が多かった。
- ・文学部会の発表が両日とも刺激的で面白かった。1日目に若手、2日目にベテランが多く、バランスがよかったように思う。
- ・文学・語学部会で古典の近世白話文学に関する発表が少なかったことが気になった。偶然だろうが、学会事務局がどうこうできる問題でもないが、少々心配。
- ・哲学、語学・文学、日本漢学、歴史の4部門の固定枠を横断的にもっと融通をきかせて、もう少し、研究発表の枠を増やす努力をして欲しい。
- ・研究報告に対する質疑時間は10分だが、これを拡大してほしい。
- ・同じカテゴリーの報告が同じ時間に重なっていたのが少し残念。
- ・時間を超過してから新しい質問を受け付けるのは(時間割の組み方にかかわらず)厳に慎むべき。今回は後ろの書評シンポジウムに影響を及ぼした。

○書評シンポジウム

- ・著者・評者の活発な意見交換が非常に面白く勉強になった。
- ・当該書への理解がより深まった。
- ・聴きごたえがあった。それだけに前の研究発表が時間を超過しており、書評シンポジウムの時間が短く、著者と会場からの質疑応答が十分になされなかったことは残念だった。

- ・シンポジウムが乱立しすぎているように感じた。
- ・シンポジウムは平均して二時間を占めるので、四人分の研究発表の枠が失われる。とくに書評シンポジウムは壇上に上がった数名が細かい議論を繰り広げる傾向が強く、会場にいる参加者をほぼ置き去りにしている。むしろ、若手の発表の枠を広げるべきではないか。
- ・書評シンポジウムに毎年参加しているが、登壇者同士のやりとりに終始してしまい、来場者との質疑応答の時間が殆どないケースが少なくないのを残念に思っている。せっかく多彩な専門の来場者がいる会場でやるのだから、登壇者同士の意見交換は事前にオンラインか何かで一通り済ませておいて頂くなり、その場で生じた登壇者間の疑問・質問は閉会后に個人的にやりとりして頂くなりにして、当日その場では来場者との意見交換にもっと時間を割いて欲しい。

IV. 本大会、今後の大会について

■QRコードによる参加申し込みについて

12. 本大会において導入したQRコードによる参加申し込みについて、操作の状況をお選びください。

● 問題なく操作できた	153
● 何とか操作できた	25
● うまく操作できなかった	42



本設問については、設定のミスにより、大会不参加者を含む全員に回答を求めたため、大会参加者（対面）のみの回答状況を示す。114件の回答のうち、「問題なく操作できた」90名（78.9%）、「何とか操作できた」13名（11.4%）、「うまく操作できなかった」11名（9.6%）であった。なお、自由記述欄での回答には、「参加費をQRコードで簡単に払えたことがたいへん便利」という意見がある一方で、「QRコードで申し込む方式なので参加しなかった」「クレジットカードを持っていないので、PayPayなどを導入してほしい」「パソコンから申し込めるようにしてほしい」などの意見も見られた。

【大会委員会からの補足説明】

今年度から大会参加の申し込みと参加費の支払いをオンライン決済としました。スマートフォンの操作やオンライン決済が不慣れな会員にはご不便をおかけしました。これまでの参加費徴収では、大会準備会がゆうちょ銀行で口座を開設し、さらに振込用紙に参加費や弁当代、懇親会等項目を印刷し、それを大会要項とともに会員に発送するとい

う形式を採ってきました。しかし、近年マネーロンダリング等の対策が強化され、大会準備会という法人格のない任意の団体が口座を開設することは難しくなっています。2024年度大会では二松学舎大学の大会準備会が何度トライしても口座を開設することはできませんでした。オンラインでの申し込みや決済は、郵便局に足を運びづらい会員にとっては大きなメリットです。また開催校の作業を効率化することもできます。従前の方式ですと、準備会は郵便局から五月雨式に届く振込取扱票の明細と振込の総額が合致しているかどうかをチェックしつつ大会参加者名簿を作成せねばなりません。今後もオンライン化は避けられません。なにとぞご理解ください。

■大会の支援に関する要望、今後の大会開催に関する意見等

大会の支援に関する要望では32名の方から、今後の大会開催に関するご意見では、56名の方からご意見があった。この2つは重複するものも多いので、以下、項目ごとに整理し、大会委員会から現状認識について説明を補足する。

1. ハイブリット開催への要望

最も多かったのが、「ハイブリッドで開催して欲しい」という意見。その理由は、「遠方の開催になった場合、旅費を支出することが難しい」、「入試業務と時期が重なる」、「コロナ後、校務優先で、学会発表以外の出張への参加が難しい状況となってきた」など。

【大会委員会からの補足説明】

今回は特別シンポジウムのみオンライン配信となりました。従前より全面的にハイブリット方式での大会開催を望む声があることは承知しています。全てのプログラムでハイブリットの運営を行うには多くのマンパワーと十全な設備を要します。コロナ禍以降、大学ではWi-Fi環境が徐々に整備されてきましたが、土日にトラブルが発生した際に対応できる大学はありません。放送部の全面的な協力を得ることができた早稲田大学での全プログラムハイブリット開催は極めて稀な例です。同じ内容の配信を外注するとなると、試算では1日1会場40万円ほど、2日間3会場で240万円程度が必要です。これは参加費を1万円以上に値上げにしない限り難しい話です。人手不足から開催校を引き受けてくださる大学も減りつつある現状を思えば、開催校にこれ以上の負担を強いる全面ハイブリット方式は当面は見送らざるを得ないのが現状です。ただ、新しく発足するデジタル化推進委員会と、将来、どのような方式ならば可能か、今後検討したいと思います。

2. 大会のレジュメ問題

主な意見は「部会によってレジュメが不足したり、大量に余っていたりと、資源のロスがある」こと、また「レジュメ印刷費用がかさみ、学生や非常勤職の場合、負担になる」、「オンタイムのオンライン開催が難しい場合も、レジュメや記録映像のオンラインでの配信を

検討して欲しい」「当日発表資料の提供（「ダウンロード不可で閲覧のみ」という形でも良い）」などの要望もあった。

【大会委員会からの補足説明】

大会では発表者にレジュメ 200 部の印刷準備をお願いしていますが、発表によってはレジュメが当日不足し、必要な会員が会場で入手できないなどの問題が発生しています。また、常勤職のない会員や学生会員にとって、レジュメ 200 部の印刷経費は大きな負担だという意見も寄せられています。解決策としては、pdf化したレジュメをwebサイトから参加者が各自ダウンロードする方式が考えられます。この件、大会委員会としては新しく発足するデジタル化推進委員会とともに、将来に向けて検討したいと思います。

3. 発表の応募と採否について

「発表を申し込んだが、希望者が多いという理由で採択されなかった」、「新入会員が発表を目的として入会したのに、発表ができなかった。シンポジウムの時間を削減してでも新入会員を優先すべきでは」という不満の声が寄せられた。

【大会委員会からの補足説明】

大会発表の募集にあたっては、応募時の日本語概要をもとに審査を行うこと、応募状況により調整すること、バランス等も勘案して審査を行ない、やむを得ずご発表をお断りすることもあることなどを明記しています。審査は開催校の準備委員会と大会委員会委員長、大会担当の副理事長からなる審査委員会で行っています。審査では 800 字以内の日本語概要が重要になりますので、誤字のないように、発表内容のオリジナリティが明確になるように作成をお願い申し上げます。

4. 懇親会について

「発表者で、締め切り日前でも参加人数が超過して出られなかった、今後、発表者の懇親会の参加枠を設けるべきではないか」、「懇親会参加希望者は全員受け入れられるようにすべきではないか、全国から集まる機会に意見交換や懇親を深めるべき」という厳しいご意見をいただいた。

【大会委員会からの補足説明】

今回、懇親会の会場のキャパシティの問題で、想定以上の申し込みがあったため大変ご不便をおかけしました。都心の大学での開催の場合、連休に、学外で廉価な懇親会場を確保するのは難しいという事情もあります。特殊事情であったことをご理解ください。

5. その他

自由記述欄には「組織に属さない定年退職者が発表することに対する支援は検討されて

いるか」という質問がありましたが、目下のところ、大会発表に関する支援は非常勤を含む若手に限定されており、定年退職者に対する発表支援はありません。